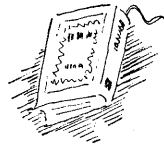


# 水戸藩と保母第一号豊田芙雄子



渡 辺 宏

## 芙雄女史の生い立ちと家庭環境

東京女子師範附属幼稚園が誕生して満百年になった。その保母第一号豊田芙雄女史が生まれた弘化二年（一八四五年）は徳川幕府も外国船の渡来等により風雲急を告げたが、女史の出身地水戸藩にとっても、いわゆるご国難の非常時であった。藩主徳川斉昭（烈公）は、盛んに新政を施策し、国防教育等の改革事業を興したので、幕府の嫌疑を受け隠居謹慎を命ぜられ、父君桑原信毅も、女史が生まれてより百日ばかりたつと、幽囚の身となり、住居を召上げられて、小家屋当て換え蟄居せしめられ、家族はその蟄居屋敷に日陰者の生活を四年間も続けた。その間極く限られた親族以外の人との交際もできず、近所の子どもとも遊べない寂しい幼年時代の毎日だった。それでも母親雪

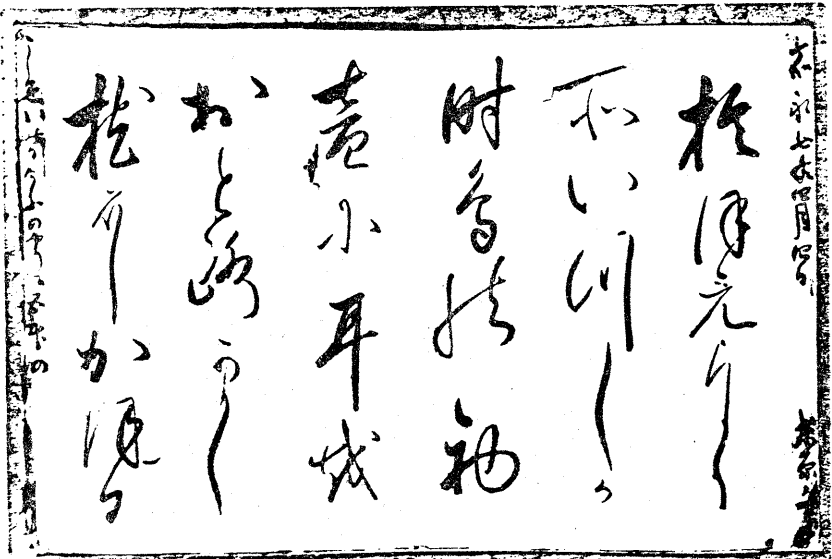


▶ 保母時代の芙雄女史

子の膝下にあつて、温かい内にも厳しい家庭に育つたのであつた。

父親桑原治兵衛は初めの名は幾太郎、諱は信毅、照顔堂と号し、天保二年に進士し彰考館（水戸光圀・義公が開いた大日本史の編纂所）に勤め、長沼流の兵学を善くし、国学にも通じ、常に筆を執り数多の筆写著作がある。祖父の治右衛門は、烈公の御息女雪姫の御附士として鷹司公家に上り京都におつたので、父治兵衛も折々京都に赴き諸所の山陵を拜してはその荒廃をなげいていたが、後藩命により御附士として三年間京都に在勤し、この間山陵に関する取調べもし、大日本史の資料となつたのである。殊に大和歌傍山の東南の神武天皇御陵の荒廃については、当時水戸彰考館総裁で後日女史の舅となつた豊田天功と、しばしば書を往来して著作したのが「武山陵考」となつて残っている。

母親雪子は水戸学中興の英傑藤田幽谷の次女である。幽谷の門下からは兄東潮を初め、会沢正志斎、舅豊田天功、桑原信毅等当時の天下の学者や志士の師表と仰がれた多くの人物が輩出した。後年、女史は「母は自分の口から言つてはおこがましいが、幽谷の子だけあり、女ながらも相当に学問がありました。幽谷は漢学も国学も善かつたのですが、その剛直な漢学方面



▲ 英雄女史八歳の習字

は男子東湖に伝え、柔和な国学の蘊蓄を女子雪子に伝えたりしたので」と述懐している。維新の大指導者東湖も伯父に当たる。

女史の幼少の時は専らこの母雪子が詩歌を読み聞かせ家庭教育に当たり、五、六歳より師匠につき手習裁縫作法や薙刀の伝授を受けた。八歳半ばにして書いたのが、写真のように達筆だった。このように恵まれた家系に生まれたが、この母は十一歳父は十六歳の時他界してしまつた。

女史の一生は実に波瀾万丈の人生であつた。伯父東湖も丁度女史の生まれた弘化二年には、獄中であつて弘道館記述義の初稿をかきあげ、中国の文天祥が作った正気の歌に和して正気歌を作っている。この漢詩は、「天地正大の気粹然として神州に鍾る……」と日本の歴史を五言の長詩に詠じ、維新の志士を鼓舞激励し、偉大な感化を及ぼしたのであつたが、女史は昭和十五年五月九十五歳の晩年において、次のように回顧している。

「なにしろ遠い昔のことですから、伯父東湖についても詳しくは覚えておりませんが、今でも眼に残っているのは、その頃、伯父が開いていた私塾『不息軒』と申しましたが、その塾へ袴をはいて肩をいからして入って行く姿でございます。伯父は二十五貫、身長は五尺五、六寸もあろうかと思われる大男

で、色は黒く、頬は厚肉で、角ばつた顔でした。眉尻が少し上つて、左の眉のつけ根には、ほくらが一つございました。普通前ごみだつたといわれていますが、なかなかさうではございません。リュウとした姿勢で眼光人を射ると申しますが、伯父の眼はよく光る恐ろしい眼でございました。私のおぼえている伯父はいつも総髪で、総髪は隠居か医者でない限り普通の人間はやらないのですが、伯父もこれを好んでやっていたとは思えません。それが子供心にも不思議でなりませんでした。何かわけがあつたのでございましょう」

と、この当時は謹慎の身だったのであろうか、次いで、  
「伯父はよく酒を飲み、始終、碁を打っていました。その相手に川崎六郎という宿屋の主人がよく出入りしておりました。またいつの頃でしたか、伯父と父がお酒を飲んでいる時私が障子の隙間から中をのぞいたら、即座に指を眼にあてて、あの光る目でアカンベをしたことをお覚えております。私が驚いて逃げると、伯父は大声で笑つておりました」

と、さらに安政の大地震について、  
「あの地震は忘れもしない安政二年十月二日の朝四時頃でした。水戸でも大変な揺れ方で、私は母と共に寢床からまだ暗い庭へ飛び出しましたが、庭がまだ揺れていたのをおぼえていま

す。其の頃、父は江戸へ参つておりましたので、兄の力太郎が父の身の上を案じてすぐさま江戸へ立ちました。心配した父は別状なく、却つて伯父の東湖が、小石川の水戸藩邸（注・現東京の後楽園）で梁の下敷きになって圧死したことを知り、兄は驚いて、その伯父の亡骸を長持に入れて水戸まで持つて帰つたのでございました。その時伯父の母（幽谷夫人梅子）も一緒に藩邸にいたのですが、地震で一旦逃げ出したものの、部屋の花を消して来なくてとは、また引返そうとするのを『お母さん危ない、私が代りに行こう』と伯父が抱き止めたその時、梁が落ちて来たのだと聞いております。

私は子どもでしたから参りませんでした。母がお悔みに参りました。そしたら、伯父の死骸を拝んだ時、死んだ伯父の鼻から夥しい鼻血が出たというのを聞いております。母だけでなく、近親の者、弟子たちなど、伯父と親しい者を見ると、きまつて鼻血が出たそうです。皆が不思議だと申していました。不思議といえは伯母（東湖夫人里子）を見たとある人相見が、『御用心なさい近くあなたの身边に異変があります』といったそうでございます。等と生きた言葉で語る生きた伯父東湖の姿が眼に浮かぶ。特に、母を助けるために圧死した悲壮な最期は、日頃敬愛する伯父東湖の口先きだけでなく名実ともに身命をかけ

ての孝の実践で、純情な童心にとつて絶大強烈な教訓だったことであろう。小生も多感な学生時代小石川後楽園の道路端に立つている『藤田東湖先生護母致命之処』の記念碑を拝し碑文を読み感動し、それ以来東湖を崇拜し水戸学と郷土史を探究し続けることになった次第。

元来、水戸黄門光圀（義公）や中国明の遺臣朱舜水は孝を基本理念としたが、殊に女史の祖父藤田幽谷も非常に孝を重んじ、幼少の東湖を教育するにも特にこの孝に意を用い、孝道篤学の門人堀川潜蔵に孝経の素読を受けさせた。このことは、東湖の自叙詩史とも云うべき『回天詩史』や『東湖隨筆』に自ら記している。三つ子の魂百までの諺通り、幼児の教育に力を入れたのだった。また女史が豊田小太郎に嫁いだ年に筆写した景山女誠では、胎教まで重視した文献があり、保育の鑑にしたいと思う。

### 水戸藩の蘭学と亡夫豊田小太郎の遺志

女史は、祖父藤田幽谷に学び、幼時より神童の聞え高く、精勵勉で偉大な学儒だった彰考館総裁豊田天功の長男小太郎に、十七歳で嫁いだ。夫小太郎は俊英の誉があり、父天功と共に大日本史志類の編纂に従事。蘭学に達し『航海要録』も訳し

烈公に厭じた。烈公は天功に次のような手紙をよせている。

「俾訳、航海要録よろしく出来、感心候俾もなかなか才子と存じ候」と。そして小太郎は二十一歳にして雷名高く、全国各地から入門する者があつた。舅天功も五十歳になつてから蘭学を初めたが、聡明さと努力で忽ちその蘊奥を極め、女史の父桑原信毅と共に藩主烈公に対し、藩校弘道館でも蘭学を正式に教える提議をしたが、烈公の反対でできなかつた。水戸の儒者青山家出身で戦後初の婦人少年局長だつた山川菊江氏は、『寛書幕末の水戸藩』で次のようにのべているので、その烈公の手紙を引用させていただく。「桑原より追々申し聞け候蘭学の儀は、弘道館に於て教授致させたきよし申し聞け有之候えども、同所に於て横文字教授の儀は、我等申すまでも無之、会沢、青山とてもよろしくとは存じ申すまじく候。然るところ、豊田蘭学には、まゝり、当時同所長屋に居り候て、唯一（注・蘭学者栗原唯一）も隣に居り、便利の由にて、豊田事も同所に致したき様子に候えども、それは自分勝手というものにて、蘭学などの蟹行文字を右館中にて学ばせ候は以ての外に候えば、これは相成らざる由、我ら追々申し候ところ……」

こういふわけで、弘道館で洋学の研究は許されなかつた。しかし烈公は、そのうめ合わせでもあるまいが、豊田の健康を案

じて、貴重な牛乳を与え、運動をすすめて体力を維持するように注意を与えている。

「豊田儀、生牛乳好み候故、遣わしおき候所、このたび俾の話聞き候えば、酒はやはり多く用い候由の所、何ほど牛乳用い候ても歩行も致さず、机にのみ寄り居り候ては、必らず俗にいうよいよい病をひき出し申し候えは、宅に居り候て弘道館まで通い候よう申すべく候。遠くより歩行候えは、道に費え候よう候えども、一所に居り候てもよいよい病などひき出し候えは死候故、遠くより通い候よりは事は出来申すまじく候。豊田ぐらいの者もまたとは得難く候えは、歩行致さざるは甚だ宜しからざること候。

この雲丹海胆到来故二箱遣わし申候。一つは会沢へ伝え申すべく候。酒の節口取には然るべく、会沢は養生家故、呑みすぎ申すまじき所、量太郎は安心致さず候。何分多く用いず、養生のみ用い候ようにと存じ候…… 青山量太郎へ」

弘道館の洋学のことから、教師の一人一人の健康にまで烈公は気を配っているが、これで洋学の件はお流れになつてしまつた。翌安政四年六月、武田耕雲齋が烈公に上申して、人才を選んで英語を学習させ、以て外交の用に立たせたいと提案した。烈公は戸田、藤田在世中から、その申し合わせになつてゐるが、

人物を見て学ばせないと大害がある、と答えた。このときすでに通商は始まり、仮条約のことで京都と江戸の間がむつかしくなり、そこへ將軍世子の問題がからんで時局多端、翌年は大獄の渦中にまきこまれた水戸藩は、洋学どころのさわぎではなくなつてしまつた。

かくて夫小太郎は、当時の複雑な藩内情勢の下に尊皇開国を主張し、脱藩して京都の同志のもとに投じたが、攘夷を称える反対派のために慶応二年六月暗殺された。二人の結婚生活は形の上では五年を数えたが、新婚とは名のみで、夫は始終留守勝ちで淋しいかぎりであつた。唯、「心を鬼にしておれよ」との一言を遺し、遂に帰らぬ客となつてしまつた。しかし妻である女史は、うすうす知つたが、親族は彼女のために秘かにかくして知らされず、かなり後日になってから正式に夫の死を知らされたのであつた。よわい八十歳を過ぎてから、或る日「私の夫は本当に冷たい人でした」と家人に述べたこと。最愛の妻にさえ企ての秘密をまもつて私情を殺して一命を国事に捧げた大丈夫の心もさることながら、二十一歳にして未亡人となつてしまつた女史の心情はいかばかりだつたことか。

そればかりか、元治甲子の天狗騒ぎ（筑波旗拳）や病氣によつて僅か一、二年のうちに肉親を七名もつきつきに失ひ、文字

通り天涯孤独となつてしまつた。慶応三年九月、夫小太郎を追悼して謄書した七尺六寸の長文は読む者の襟を正さしめ、感動の涙をさそうものがある。しかし、この悲嘆のどん底より雄々しくも起ち上がったのは、夫が別れるときに遺した「心を鬼にせよ」との言葉だつた。そして決然と自活の道をえらび、自己にふさわしい教育の道によつて、夫の遺志である開国進取のため的一生を捧げようと決意したのであつた。冬子を芙雄と改名したのも実にこの時である。

### 教育者として立つ

このうら若くして未亡人になつた女史は、毎夜遠い漢学塾へ、提灯も持たず足音のせぬように草履をはき、懐剣をたばさみながら通ひ続けたのであつた。自筆の履歴書には明治元年から昼間は自宅で附近の子女を教育したことが記されている。

いよいよ明治三年になり、世の中も漸く鎮まり新時代の黎明がほのぼのと明けそめたので、私塾を開業、二、三十名の子女が集まり和漢書の手ほどきをした。

同五年には学制が布かれ、水戸旧豊田家屋敷跡に県立の発桜女学校が開設され、教員の要請を受けて、ここに私塾の子女一同を連れて移つたのだつた。因みに、「発桜」とは、丁度女史

が生まれた弘化二年に、東湖が中国の志士文天祥に和して正気歌を獄中で作ったことは前記した通りであるが、「発いては万葉の桜となり……」から名付けられたのである。全国最古の女学校だったようであるが、女史が同八年東京女子師範の読書教員として招かれ上京すると間もなく、この女学校も男子校に合併して消え、小学校になってしまった。発校女学校をやめる辞職願を県へ出したところ、大きく赤字で辞職願は聞届け難い旨の返事があつたが、まもなく文部省から県庁へ通達があり、こんどは逆に県庁が地元副戸長を通して速やかに上京出頭するようにとの通知が女史に届けられた。当時の役所も、下からの願より上からの通達に弱かつたようであるが、よくも当時の資料が保存されたと感心し苦笑させられる。

かくて、明治九年には附属の幼稚園が開設され、保母専務心得として日本での保母第一号が誕生したのであった。ここに、まだ幼児教育について一般社会が全く理解のない時代に『保育の葉』にもあるように、「人生将来の福祉安寧を得んとする基礎立つ可し」の信念に生きた彼女に満腔の敬意と感謝を捧げたい。因みに、東京女子師範摂理（校長）中村正直氏（号敬字）も女史の亡夫小太郎と同様に開国進取を称えたため、水戸攘夷派の仲間である当時の常陸府中（現茨城県石岡市）の花光院で塾を開

いていた信州出身の儒者薄井龍之のため危うく暗殺されることを、母親の犠牲的機転により助けられた。敬字も自叙「千字文」で、佐久間象山の死を惜しみながら「睡いで吾れも譏りを蒙り、あやうく災厄にかからんとす」と当時を述懐しており、同じく開国論者で不運にして犠牲になった豊田小太郎の未亡人を保母第一号として抜擢したのであった。

明治九年十一月十八日付の東京日日新聞によると、雑報欄の『ドワイ氏幼稚園の概旨』（敬字訳稿）には、第三項で「フレール氏の幼稚園の事を了解する婦女を得ること最も肝要なり、この婦人は考思する慣習を有つべし、快活の心あるべし、中心に発する内外合一の品行あるべし、小児を真正に愛する心あるべし、普通学を学ぶものなるべし、教育の理と教育の事実とを知り経練するものなるべし云々」と保母の人格が児童を感化すること大なるを重視している。このために、全国の女子教育家の中から女史を保母第一号として白羽の矢を立てたのである。尚、茨城県では保母誕生百年記念出版として、『豊田英雄子と保育資料』と女史自筆の『保育の葉』（複製版）を発行し保育まつりを開催し、豊田英雄子展、記念墓碑を建立し、現在「保育の日」と「豊田英雄子賞」の設定を準備推進中であることを附記させて頂き度い。（茨城県石岡市・泉ヶ丘保育園）

豊田 英雄 略年譜

西曆	年号	満年齢	重要事項
一八四五年	弘化二年	零歳	水戸に生まる、幼名桑原冬子
一八五五年	安政二年	九歳	江戸大地震、藤田東湖圧死
一八六二年	文久二年	十七歳	豊田小太郎に嫁す
一八六四年	元治元年	十九歳	筑波旗拳(天狗騒ぎ)
一八六六年	慶応二年	二十一歳	夫小太郎京都で暗殺
一八七〇年	明治三年	二十五歳	私塾を開き子女を教育
一八七三年	同	六年	茨城県立発根女学校教員
一八七五年	同	八年	東京女子師範読書教員
一八七六年	同	九年	同幼稚園保母第一号
一八七九年	同	十二年	鹿兒島県幼稚園へ出張
一八八六年	同	十九年	共子女子職業学校開設に従事
一八八七年	同	二十年	文部省欧州女子教育事情調査
一八九一年	同	二十四年	掃国、府立第一高女講師
一八九二年	同	四十七歳	豊田塾後翠芳学舎を開く
一八九五年	同	五十歳	宇都宮高女教頭
一九〇一年	同	五十六歳	茨城県高女(水戸二高)教頭
一九三三年	大正十二年	七十八歳	愛国婦人会副会長
一九三五年	同	八十歳	大成女学校校長(現茨城女子短大)
一九四一年	昭和十六年	九十六歳	逝去(十二月一日)

豊田英雄子略系図

